四谷の
千枚田だより
第210号

稲栽培勉強会

新しいミネアサヒについて

二月十三日、連谷会館に於いて「令和二年度中山間地域等直接支払四谷集落協定勉強会」が行われた。

内容は昨年まで千枚田の多くで作付けされていた「ミネアサヒ」が今までのミネアサヒの特性・食味をそのまま維持し、「いもち病」と「縞葉枯病」に対する抵抗性を付与した品種「ミネアサヒSBL」に変更したことから、その栽培方法についてJA愛知東営農部農機施設課の高木 勤係長を講師に勉強会を開いた。

要 約

高木係長の親切丁寧な説明から、棚田の百姓の一番の悩みが「いもち病」や「縞葉枯病」で、新しいミネアサヒSBLは殺菌剤を省くことが可能と教わり、ばかにならない農薬代も軽減、殺菌剤を使わない体に優しい棚田米が食べられる。と、嬉しい限りである。できれば、ウンカやカメムシなどの嫌気性の品種改良が成せれば…、と思いは馳せる。

・「ミネアサヒSBL」のS=縞葉枯B=いもち病　L=少ないの意味。

・中干しは水中のガスが抜ける。

・珪酸加里は吸収性がよく、茎葉を固くし、倒状軽減、いもち病耐性向上、食害軽減の効果が大きい。

・箱苗殺虫殺菌剤は リディア箱粒剤に変更。等々

ミネアサヒの知見 文献から

昭和五十五年に愛知県農業総合試験場が開発した「ミネアサヒ」は食味が良いことから人気が高く、中山間地域で栽培されている。しかし、「ミネアサヒ」は夏に冷涼な地域で発生しやすい「いもち病」に弱いため、主産地である中山間地域の生産者から、病害抵抗性についての改良が要望されていた。

そこで、平成十八年から、愛知県農業総合試験場は「ミネアサヒ」に「いもち病」抵抗性と「イネ縞葉枯病」抵抗性を導入した、「ミネアサヒ」の同質遺伝子系統の開発に取り組み、生産者の協力を得ながら栽培試験や食味試験を重ねて、「ミネアサヒ」の食味や特性はそのままで、イネの重要病害であるいもち病とイネ縞葉枯病に抵抗性をもつ「中部百三十八号」が完成。病害抵抗性以外の特性は、中山間地域のブランド米としている「ミネアサヒ」と同じであるため、ブランド(ミネアサヒ)を維持しつつ、農薬使用量を抑えた環境に優しい品種として令和二年度から生産者への種子供給を開始し、令和三年度から本格的な栽培を目指している。

・いもち病は、夏に冷涼な地域(千枚田も)で発生が多く、収量に大きく影響する。

・イネ縞葉枯病は、ウンカ（イネなどの茎葉から汁液を吸う、体長5㎜程度の害虫）が媒介するウイルス病で、生育不良や出穂異常を起こす。（昨年は「あいちのかおり」を栽培している平坦地で.大きな被害が生じたが、ミネアサヒはやや早生のため難を免れた。）

ミネアサヒは何故「まぼろしの米」といわれるか？

諸説あるが、愛知県で開発されたミネアサヒは粒が小さく、県内では、いまいちの人気であったが、九州の高千穂などの中山間地域で小粒ながら、咽喉越しの食感が抜群であり人気を博したことから、開発地の愛知県でも再度栽培奨励。もし、九州で栽培されなかったら…、人気がなかったら「まぼろし」に終わってしまった。などの逸話を聞くが、定かでない。

愛知県では県内中山間地域のみの栽培で収穫量も少ないことから「まぼろしの米」と呼ぶ。

また、四谷の千枚田は「湧き水、天日干し」と特有な恵の利を受けた美味しいおコメを産出しているが、一戸当たりの栽培面積が少なく、美味しいが故に親戚縁者に、また、お使い物にと、なかなか売ってほしいと言われても、そうそう売るほどの量がないことから「まぼろしの米」と勝手にいう。

雪降る千枚田　二月十八日　朝

仮装大賞 優勝

二月六日に放送された日本テレビ系人気番組「欽ちゃん&香取慎吾の全日本仮装大賞」で設楽町津具の「チームＴＡＫＯ」が優勝を果たした。

チームＴＡＫＯは八十二回から十七回連続出場、二回の準優勝。今回は二十点満点で念願の優勝を勝ち得た。

「チームＴＡＫＯ」の固定メンバー六人は「四谷の千枚田」の応援団でもあり、毎年、趣向を凝らしたリアル案山子を千枚田に立てていただいている。

千枚田に案山子が初めて来たのは今から四年前で、赤い自転車の郵便配達のおじさんと千枚田のお婆ぁが喋くっておる姿。二年目は大八車に千枚田米の米俵を乗せ、老夫婦が運んでいる姿、三年目は脱穀した籾を背負板に背負い畦道を運ぶ老夫婦。そして昨年は千枚田のミネアサヒの特大おにぎりを食べる「一服」の姿と、毎年趣向を変えたリアル案山子は千枚田の人気者になっている。また、ベンチに座った百姓姿の案山子は、保存会のイベントや豊橋まつり、名古屋の国際交流館（あいち・なごや生物多様性ＥＸＰＯ）にも出向き、知事さんに「まぁ～座りん」と呼びかけ、ベンチに一緒に座って頂いたりと、「四谷の千枚田」をアピールし続けている。今は、市立鳳来寺山自然科学博物館で昨年開催された「夏の特別展」に出張したまま、居心地が良いのか、博物館の玄関で来観者に愛想を振りまくっているそうだ。

ホッコらニュース

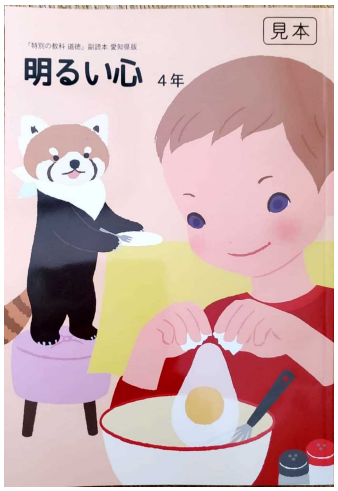
四谷地内合戸川の通称「心中淵」に仮橋を架けた。

三面張りに架かる橋が老朽化し、渡れば絶対に落ちる危険な箇所で、かれこれ八～九年区長さんを通して市に安全対策（材料支給等々）をお願いをし続けてきたが、市も毎年変わる区長さんの要望を受け、現地確認はするものの、財政難？を口実にウヤムヤ、区長さんと行政の年度ごとのイタチごっこが続いている。

田んぼの水源の見回りや、橋が渡れなく野菜畑も世話ができない。業を煮やした小山秀夫と（舜）は「やまかつ建築」さんの好意で頂いた厚い丈夫な板で仮橋を作ってしまった。

教科書に掲載

新年度から四年生の児童は「特別教科 道徳」副読本 愛知県版 明るい心の教科書に掲載された四谷の千枚田（全六ページ）に自然観察会でモリアオガエルのオタマジャクシを放流、三年後にはここで卵を産むようにナンテンを植え、三年後にナンテンに卵を産んだ話を教習。



《教科書本文抜粋》オタマジャクシが動き回ると、田んぼの草が生えにくくなる。そしてカエルはいねにつく害虫を食べてくれるというわけだ。」「カエルってすごい。田んぼの守り神だね。」…そして、三年がたった今年六月、小山さんと植えたナンテンの木に、白いあわがついていました。モリアオガエルの卵です。などなど、自然豊かな千枚田が紹介されている。

ヤマアカガエルの産卵

千枚田で二月十六日早朝、昨日の雨で産卵がみられた。

ヤマアカガエルは春の最初の雨の日に産むと云われていたが、平成十五年に移殖してからの観察では厳寒期の一月初旬でも雨が降れば産卵がみられる。そこで、これを実証するため、田んぼに水を張らず様子をみたところ一月二十三日に二十五㎜の雨が降ったが産卵はなく、田んぼに水を張ったところ二月十五日（四十五㎜）で待ちかねたように十六個体が産卵。カエル合戦で傷だらけのへい死個体もみられた。

発行　令和三年三月一日
鞍掛山麓千枚田保存会
文責　小山舜二